

1920年代：郁達夫の社会文化的研究(2)：作家としての経済生活の様相

李, 麗君
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494548>

出版情報：比較社会文化研究. 13, pp. 32-40, 2003-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



1920年代：郁達夫の社会文化的研究（二）

——作家としての経済生活の様相——

李^リ麗君^{レイクン}

はじめに

これまでの郁達夫に関する先行研究においては、一般的に郁達夫の生涯を語る伝記、及び伝記的な研究は決して少ないとは言えない。しかしながら、作家郁達夫の生活をテーマとして、ある視点から詳細に考察するものはこれまでほとんどなかった。したがって、今日に至って、郁達夫の生活については、まだまだ不明確な点が多く存在している。一方、「生活」というものには微細で多様な内容が含まれるため、総合的な角度からの考察を行うためには極めて膨大な作業が不可欠であり、それほど簡単に解決できる問題ではない。本稿では、作家にとって非常に重要な「原稿料」「印税」という「制度」に着目しつつ、それに絡んだ郁達夫の経済的物質的生活実態を具体的に考察する。

一 郁達夫の文学活動スタートの背景

非職業作家の時代

二十世紀20年代、特にその前半期における中国では、文筆活動以外に職業を持たない文人はほとんどあり得ない時代であった。当時、有名な文学者の大半は大学教員という職業をもっていた。例えば、胡適は大学教授が本業であり、周作人の身分も大学教員、そして魯迅は中華民国政府教育部の役人であり、茅盾も上海商務印書館の編集員、郭沫若は編集者、教員、さらには政治家へと次々と転身していった。要するに、文学者は何らかの職業をもちつつ、文学活動を行い、次第に職業作家に近づいていくという時代であった。

20年代の出版メディア

郁達夫が初めて小説を発表するのは、日本留学中の1921年であった。当時、雑誌出版メディアは、まだ後日のようには発達していなかった。例えば、雑誌と新聞を見比べると、新聞は主に北方の北京と南方の上海を中心にいくつかの大きな新聞社が集まっているだけであった。

上海においては、近代中国において最も早く、最も歴史の長い新聞『申報』（1872～1949）や『新聞報』（1893

～1949）、『時報』（1904～1939）、『神州日報』（1906～1947、途中二度停刊）、『時事新報』（1907～1949）、『中華新報』（1915～1924）、『民国日報』（1916～1947、国民党機関報）等が数えられる。

北京の場合は、1928年まで、民国政府（「北洋軍閥政府」）の所在地だったため、上海と比べると、新聞はかなりの規制や弾圧を受けた。主な新聞には、『晨鐘報』＝『晨报』（1916～1928；梁啓超などを中心とした進歩党〈後は憲法研究会へとなるため、研究系とも呼ばれる〉の機関報；1918年12月から新聞名を『晨报』に変更；1921年から、その学芸欄〈副刊〉は『晨报副鰲』へ名を改め、積極的に新文化運動を提唱していた）、『京報』（1918～1937；途中三度、北洋政府によって取り締まられる；学芸欄としての「京報副刊」は『晨报副鰲』に次ぎ、影響が大きかった）、『世界日報』（1925～1937；同紙は文化界・教育界についてのニュースや記事を数多く掲載していた）等が挙げられる。他には、国民党系の新聞もあって、北京での国民党機関『国民日報』（1924～1925）もその一つであった¹。

雑誌になると、ほとんどは同人雑誌の性質を有したものであった。国内最大の総合出版社である商務印書館の『東方雑誌』（1904～1948、総合雑誌、上海）、北京大学の教授を中心として編集、執筆した『新青年』（1915～1926；総合雑誌、1916年末、編集部は上海から北京に移る。五四運動前後において最も注目を集め脚光を浴びた月刊誌の一つ）、『毎週評論』（1918年12月～1919年8月、総合雑誌、北京）、北京大学学生結社「新潮社」の月刊誌『新潮』（1919～1922；前期は文学雑誌、後期は学術雑誌へ変身）、『小説月報』（1910～1932；商務印書館の文学雑誌、1921年から、実際に文学結社「文学研究会」の代用機関誌となる。中国近代文学史上最初の大雑誌）、総合月刊『少年中国』（1919～1924；「少年中国学会」機関誌）、総合週刊誌『努力周报』（1922年5月～1923年10月；胡適主宰）等が当時の主要な雑誌であった。これらは、『東方雑誌』を除けば、みな同人誌であった。

¹ 王文彬編著『中国現代報史資料彙輯』（1996.9 重慶出版社）参照。

郁達夫の創作活動の開始

こうした出版事情の中で、郁達夫は創作活動を始めた。しかし、日本滞在中の留学生として、郁達夫や郭沫若、成仿吾らは頼りになる発表・出版の場がまったくなく、やむなく読者の多い大新聞紙に目を向け、投稿することにした。まず、郭沫若であるが、彼は1919年9月から新体詩を『学燈』へ投稿し、その独特なスタイルやロマンチックな情緒に満ちた作品が編集者の心を捉え、続々と採用された。以来、1921年8月に出版された処女詩集『女神』（泰東図書局）に収めた大半の作品は『学燈』に掲載されたものであった。こうした点もあってか、郁達夫も1921年2月に初めての小説「銀灰色の死」を脱稿すると、直ちに『学燈』へ投稿し、同年7月7～13日の間六回にわたって連載されたのである。

二 20年代作家の経済状態

原稿料——郭沫若の場合

1921年8月、まだ東京帝国大学経済学部在学中の郁達夫は、『創造』季刊の編集のために、郭沫若の後を継いで一時上海にある泰東図書局にやってきた。しかし、書局で働く（もちろん自分たちの待望の雑誌を出すことも重要な目的だが）とは言え、正式な職務や給料は一切なく、書局経営者趙南公から住や食を提供してもらい、不定期に小遣いをもらうという程度に止まっていた。書局のためにあえて学業を中断し、力を出版社の仕事に注ぎ込んだが、自分たちの経済的状況の改善につながるものではなかったというのが当時の実情である。

例えば、郁達夫が泰東図書局にやってきて、郭沫若の仕事を引き継ぐまでに、郭沫若は泰東での1ヶ月半の間（1921年4月はじめ～同5月末）に三つの仕事をやり遂げた。①『学燈』等で発表した詩及び未発表作品56を集めて戯曲詩歌集『女神』を編集したこと；②かつて一高留学時代の同級生銭君胥訳『茵夢湖』（ドイツ作家シュトルム〈1917～1888〉の小説『みずうみ』）を改訳したこと；③元・王実甫の雑劇『西廂記』の標点本の編輯（その際改編）。これらはいずれも読者に受け入れられ、よく売れた。一年のうちに『女神』は三版、『茵夢湖』は六版、『西廂記』も三版まで版を重ね、出版社の名が多くの人々に知られるようになっただけでなく、経済的にも良好な結果をもたらした。当時の一般的慣例では、例えば、最も規模の大きな商務印書館と中華書局の場合、大体一割五分の比率で印税を支払うことになっており、原稿を出版社に売る場合、千字2～

5元が普通の相場であった（もちろん有名人の場合は別である。例えば、ほぼ同じ1922年前後、梁啓超の商務印書館での原稿料は千字20元、胡適は6元であった²）。大体、10～20%というのが当時の印税の状況であった³。大手の商務印書館と中華書局以外では、1921年、泰東図書局が郭沫若に約束した印税は10%、胡適などが1927年に作った新月社は初版15%、再版から20%であった。雑誌や新聞紙の原稿料もほぼ同様の状況であった。

統一基準のない原稿料

当時は統一した原稿料基準がなく、地方や出版側の都合によって様々であった。陳明遠氏の調査⁴によれば、20年代の北京では、政府系の雑誌新聞及び学術雑誌の場合、千字4～5元になり、民間経営の場合は1～3元であった。こうした基準は10年代末から30年代にかけてほとんど変化がなかった。例えば、20年代後半から30年代前半までの間、魯迅の原稿料は大抵千字3元であった。郭沫若の場合、最初泰東図書局との間に、口頭で10%の印税の約束を交わしたが、実際には書局側から印税や原稿料という形のものは一切出ていなかった。その代わり、泰東図書局の経営者は郭沫若に日本－上海の往復旅費を支給したり、家族へのプレゼント及び小遣いをやるだけで出版社の仕事の報酬としていたのである。

郁達夫と泰東

郁達夫の場合も、郭沫若と同じように泰東図書局のために働くことで、本格的に自分の文学活動を始めたのである。1921年9月、彼は泰東図書局での郭沫若の仕事を引き継ぎ、日本から帰って生活や仕事の「拠点」を上海に置き、主に泰東図書局が出版を承諾した創造社同人雑誌『創造』季刊の創刊に務めることになった。しかし、泰東図書局はもともと小規模な出版社である上、経営管理の混乱や資金の不足などの問題も重なり、郁達夫に文学編集、文学創作及び生活のための条件を十分に提供することができなかったのである。そのため、郁達夫は書局側から紹介された学校へと赴任することになった。

ベストセラーになった『沈淪』

まもなく彼の小説集『沈淪』は「創造社叢書第3種」として泰東書局から出版された。『沈淪』の赤裸々な性的描写、特に青年の性的煩悶に対する大胆な表現はすぐさま激しい反響を呼んだ。文学研究会の茅盾は『小説月報』13巻2期に読後の感想を発表し、作品が作者の自叙伝に近いと指摘している。さらに、周作人は評論『『沈淪』』（1922.3.26『晨报副鰲』）の中で、『沈淪』が「不道德の文学だ」とい

² 子冶「梁啓超と商務印書館」、『商務印書館九十年』、商務印書館、1987年1月、502頁。

³ 震声「漆黒一团的出版界」（1925.10.16『洪水』半月刊第1巻第3期）、茅盾「商務印書館編訳所和革新『小説月報』的前後」（1987.1商務印書館『商務印書館九十年』）参照。

⁴ 陳明遠『文化人と銭』（2001.1百花文芸出版社）54～62頁参照。

う非難について弁護をし、『沈淪』は芸術的な作品である。しかし、それは“受難者の文学（Literature for the initiated）”であるが、一般の人の読物ではない」と評価している。こうして、『沈淪』は文学評論家、作家たちから注目されただけでなく、普通の読者、特に若い読者層を引きつけ、この時期早くもベストセラーになったのである。

しかし、書局側との関係には極めて曖昧なものがあり、『沈淪』は連続10版以上まで版を重ね、発行部数が3万あまりにも達したのに、作者としての郁達夫は全く印税をもらうことがなかったのである。また、泰東図書局から出版した『創造』季刊創刊号を見れば分るように、郁達夫はその号に小説・文芸随筆・翻訳それぞれ1篇を発表している。3篇の字数は合計2万4千字前後なので、普通なら50～60元の原稿料をもらえるはずだったが、前述の理由で、郁達夫にはそれがなかったのである。この時期、郭沫若や郁達夫が経済的不自由さや生活上の苦しさをしばしば訴えていた原因の一つは、そこにあったのである。

文化教育関係職業の収入状況

一方、その前後の時期、1922年には、日本留学出身の田漢は月給100円の条件で中華書局に入り、その後、さらに200円の月給でイギリス留学出身の徐志摩が文学月刊の編集者として迎えられている。ここには、前述の待遇の面での日本留学生と欧米留学生の差がはっきりと出ている。ちなみに、20年代前半には、文化教育関係などの職業別の収入は次の通りである。

国立大学 教授 講師（非常勤） 助教（助手）	240～280元 一時間5元 50～100元 ①
公立私立中学校・高校教員	100～200元
小学校校長	100元
小学校教員	30～70元
公務員（一等課員）	100元 ②

①李書華『七年北大』、『北大旧事』、生活・読書・新知 三聯書店、1998年3月
②陳明遠『文化人と錢』、百花文芸出版社、2001年1月

『創造』季刊の創刊と泰東

当時、あまり人に知られておらず、規模も小さい泰東図書局は、創造社のおかげで少なくとも出版界、特に文学界の人々から注目されるようになった。郭沫若、郁達夫が力を注いだ『創造』季刊は発刊（1922年5月）当時から、出版界や文化界で注目されたのだが、新人の作った純文学雑誌として、その経済的「効果」はまだ楽観できるものではなかった。

創刊号は5月に出版され、6月になって横組に変えて再版することになったが、発行部数は千五百部に過ぎず、出版社側にとってまだ直接に金もうけの対象となるものでは

なかった。出版業界の人によれば、当時、本や雑誌を出版する際、発行部数が1千～2千部の場合、もし再版がなければ大体赤字になる可能性が高かったらしい⁵。このような意味で、創造社の働き、その働きが作り出した「効果」は書局の影響力の拡大に対して多く寄与したが、それによって、直ちに書局の経営や創造社同人たちの境遇、特に生活状況の好転に直結するものではなかったのである。

創造社主要メンバーの集結と週刊・日刊の発刊

1922年7月、郁達夫は日本留學生活を終え帰国し、泰東図書局でしばらく創作活動をしてから、安慶法政学校での仕事に移った。1923年2月、郁達夫は安慶法政学校を辞め、上海に戻った。4月には、日本から帰国した郭沫若及び成仿吾らをあわせ、はじめて創造社の中堅が上海に揃い、創造社の活動はいよいよいわゆる「黄金期」に入ってきた。

5月に、文芸評論を主とした『創造週報』を創刊させてから、創造社の活動は急速に読者に受け入れられるようになった。7月に、上海の『中華新報』（1915～1924）編集長張季鸞から『中華新報』で日曜を除き毎日版半の学芸欄を編集してもらえないかとの要請を受け、編集決定権がすべて創造社にあり、月百元の編集料という条件で引き受けることになったのである。

具体的には、その欄名が「創造日」に決まり、郁達夫・成仿吾・鄧均吾らの3人は編輯を担当、編輯料は郁達夫が60元、成仿吾と鄧均吾はそれぞれ20元に決まった。郭沫若の『創造十年』によれば、同人たちは『中華新報』の要請を受け入れるかどうかについて話し合った際、郭沫若は編集者の数が足りないこと、『中華新報』にはある種の政治的傾向があることを理由として賛成しなかったが、結局賛成多数で要請を受け入れることが決定された。当時の状況を詳細に検討してみるならば、経済的に相当困難な状態にある創造社の同人達にとって、百元の編集料は少しでも助けになるということも郁達夫、成仿吾達がその要請に応じた原因の一つかもしれない。

創造社と泰東の齟齬

ここにきて、創造社は季刊、週刊、日刊が揃い、猛烈な勢いで全国に向って発信できるようになった。やがて創造社の何も恐れず勇敢に社会秩序へ挑戦しようとする戦闘的姿勢が、多くの人々、特に社会の閉塞した現状に不満を抱く青年の心を捉えるようになった。その証明は雑誌発行部数の増加にも現われている。『創造週報』を例とするなら、最初は三千部であった発行部数が、一年の内に倍の六千部にも増えたのである。

しかしながら、創造社同人と泰東書局との関係はまった

⁵ 呉鉄声『解放前中華書局瑣記』、『中国出版史料・現代部分』第1巻上冊、山東教育出版社、2001年4月、208頁。

く変わることなく、彼らは創造社の3種類の雑誌及び叢書を編集し、その代わりに書局から住・食・小遣い程度のもを提供してもらうのみであった。このように、創造社のメンバー達はみな経済的余裕のない生活に耐えながら、懸命に文学活動が続けていたが、やがて書局側への不満が次第に高まってきた。

泰東経営の実態——沈松泉の証言

今日の研究者たちは、その歴史的な経緯を評するとき、基本的に創造社に同情する立場に立ち、書局が創造社を搾取したことだけを述べているが、それはやや一方的であり、公平さあるいは歴史的な考察に欠けているように感じられる。かつて泰東図書局職員であった沈松泉（1904～1990）は当時のこうした状況について、次のように述べている。

趙南公は泰東創立時からずっと社長の任にあたり、社会的活動にも熱心で、上海商界連合会の中心的人物でもあったが、彼自身の書店の経営そのものは成功したとはいえなかった。出版は無計画で、営業収入もきちんと把握しておらず、健全な会計制度も人事制度もなかった。また彼自身は阿片吸飲の慣習があり、書局の経営を古本屋出身の黄長源という人に任せていた。この黄經理はただ新しく書物を出版したら、各地の関係のある書店へ送り、代理販売をしてもらい、三節（端午、中秋、年末）になって、ようやく各地の書店から代理販売の売上金がある程度かえてくるというやり方を知っているだけであった。こうした状況下、書店は日常の営業収入をまったく把握できず、上海の小売店の収入だけに頼って、いろいろな支出に対応していた。そのため、泰東に勤める人は給料を定期的に支給してもらえないのだ。成、郭などは泰東で勤めていた間、編集者としての月給も決まらず、彼らの原稿料も事前に話し合っただけで決めたものではなかった。彼らは金が必要な時になって、書店から少額を受け取っていたのであった。

趙南公虽然从泰东一创立就任经理，又热心从事社会活动，为上海各路商界联合会的核心人物，自己主持的书店却经营得并不理想。出版没有计划，营业收入没有一定的把握，没有健全的会计制度和人事制度。他自己又染有吸大烟的嗜好，书店的经营委之于一位旧书店出身的黄长源，这位黄经理只知道新书出版后放帐邮寄给各地有联系的书店代销，直等到三节（端午、中秋、年底）各地书店才

把代销的书款或多或少地汇来。在这种情况下，书店对日常的营业收入毫无把握，只靠上海的门市收入来支付各种开支。因此在泰东工作的人，并不能定期领到应得的工资。成、郭等人在泰东工作期间，作为编辑既没有确定每月工资多少，他们的稿费也不事先商定。当他们需要钱用时，就向书店零星支取。

——沈松泉「泰東図書局經理趙南公」（『出版史料』1989年第2期）、『中国出版資料・現代部分』第1卷（上冊）333頁

沈松泉の他、もう一人の元泰東書局職員張靜廬にもほぼ同じ内容の回想がある⁶。

曖昧な関係——創造社と泰東の訣別の要因

また、上の沈松泉の証言によれば、実際創造社メンバーたちは趙南公にも苦い思いをさせられたようである。そのため、彼は郁達夫に安慶法政学校の仕事を紹介したり、役所からある仕事を請け負い、その分の給料を郁達夫に払うべき給料や原稿料に当てていたこともあったという⁷。

要するに、泰東書局では、創造社同人たちは泰東書局との協力によってともかくも結社としての出発を現実にしたが、こうした書局の事情によって、厳しい生活局面に耐えなければならなかったことも明白な事実であった。後に、郁達夫は郭沫若から反対があったにもかかわらず、上海を離れた理由に、こうした当時の状況が直結していたといえるのである。

三 郁達夫——職業作家へとの転身

20年代中期以降——職業作家育成の環境の形成

この時期の郁達夫は、作家として様々な文学活動を行い、各種のジャンルの作品も執筆したが、上述したように、創造社同人と泰東書局との特殊な関係によって、一般的な出版制度や文学制度の中で単純に著作をもって生活に必要な基本的な条件を整えるという状況には至っていなかった。

郁達夫は、北京・武昌・広東での教員生活を経て、1926年末から、いわゆる職業作家の道を歩み始めた。特に1927年8月15日『申報』と『民国日報』に発表した創造社離脱表明「郁達夫啓事」⁸によって、郁達夫はほとんど創造社との関係を断ち切って、本当の意味での「売文為生」（文を売ることによって生計を立てるという意味）の生活を自分の意志とは関係なく始めたのであった。

一方、新文学は約十年の歳月を経て、大きな発展を遂

6 張靜廬『在出版界二十年』（1984年上海書店影印本〈復刻本〉）参照。

7 沈松泉「泰東図書局經理趙南公」（『出版史料』1989年第2期）、『中国出版資料・現代部分』第1卷（上冊）333頁。

8 「郁達夫啓事」の内容は次の通りである。

人心が陰悪で公道が存在せず。この度、創造社が詐欺されたことはすべて達夫が責任を果たさず事前に防げなかった故である。今後達夫は創造社との関係をすべて断絶し、達夫が国内国外の新聞雑誌で発表するものについては、達夫個人は責任をとり、創造社と関係ないことをここで声明し誤解されないようお願いいたします。

げており、文学創作を職業とする作家は人数がそれほど多くないが着実に現われ始めている時期でもあった。それに関連して、出版メディア——出版社（当時「書店」「書局」と呼ばれるものが多かったが）・雑誌・新聞紙などが以前と比べ格段に発達してきたことによって、文学は次第に一種の流通商品として市場経済の範疇に移り、経済的に独立した職業作家を育てる様々な制度が形成されつつある状況に至った。

郁達夫個人について見るならば、彼は20年代後半になって、数多くの作品を発表し、かなりの有名作家のランクに入っており、文学制度の進化に伴い、プロの作家へと転身することがついに可能な段階になってきていた。

20年代後半上海出版界の印税制度

郁達夫が日本から帰国したばかりの頃と比べると、20年代後半上海の文化市場・出版市場は大きく変化をしていた。職業作家及び彼らと互いに支えあう商業経営実体としての出版業界がそれぞれ成熟しつつあったのである。例えば、作家の生活に直接かわる原稿料あるいは印税の制度は、かなり明確化したものとなっていた。その具体的な中味について、当時有名な良友図書公司編集者である趙家璧（1908～1997）は次のように記している。

当時、上海の出版社経営者が作者へ報酬を支払う方法は二つあった。一つは印税制である。書籍に明記される定価×実際に販売した部数、その10%～20%を印税として支払う。決算は一年に二回。原稿を提出する時にあらかじめ作者に一部の印税を支払う出版社もある。『良友文学叢書』は毎冊字数と関係なく、一律定価を大洋（銀貨）9角にし、印税は一律15%にする（魯迅の場合は20%にする。これは当時上海にある他の出版社の慣例でもある）。原稿を提出の際、あらかじめ一部の印税を払うこともあり、その金額は二百元前後であった。このやり方は当時前者に比べ作者に歓迎された。もう一つは、一回で著作権を買いきるやり方である。千字で5～10元、あるいはそれ以上になる。……しかし、私が良友で勤めていたときはどのような原稿に対しても二つ目のやり方は取らなかった。このやり方は作者に不利であったからだ。

当時上海出版商付作者稿酬分为两种办法，一是版税制，按书上标明定价，根据实售册数，按百分之十至百分之十五的版税，一年分两季结算。有的书店可在交稿时预付部分版税。《良友文学丛书》每种不论字数多少，一律售大洋九角，版税一律百分之十五计（鲁迅的按百分之二十计，

这是当时上海其他书店的惯例），交稿时都可预付一笔版税，约二百元左右。这在当时是比较受到作者欢迎的。第二种是一次卖绝版权，每千字五元之十元或更多。……但我在良友工作期间，对任何文稿从不采用第二种办法，因为这对作者是不利的。

——趙家璧「回憶郁達夫與我有關的十件事」、《新文学史料》1985年第3期

職業作家への出発と創造社離脱

1924年8月までに、創造社が編集し、泰東図書局によって出版された季刊・週報・日刊は相次いで停刊となり、創造社と泰東書局の「協力関係」は終焉を迎えた。1926年3月、創造社同人たちは自分達の出版社——創造社出版部を立ち上げた。この出版部は株式制の出版社で、「創造社出版部章程」（1926.12.1『洪水周年増刊』）によると、第1期の事業費は五千元で、計千株、一株5円で募集するという⁹。翌年、郁達夫は創造社と分れた。この時、彼は所属する団体のない「独立した」作家として新たな生活に踏み出すことになったのである。

1926年から、郁達夫はそれまで発表した作品を集めた『達夫全集』の編集を始め、第1、2巻は創造社出版部から出版された。彼は出版部の責任者として苦労が多かった。彼は友人への手紙の中で、「現在、『洪水』半月刊、『創造月刊』は、すべて私一人で責任をもって編集しており、月五、六万字の原稿を書かなければならない……」（現在《洪水》半月刊、《創造月刊》、都由我一个人在这里负责编辑，一个月差不多要做五六万字的稿子，……）と、当時の状況を記している。

しかし、一方、郁達夫と若手の創造社メンバーとの間での意見ややり方の違いは次第に明らかになってきており、27年に蒋介石政権を非難する文章を発表したことで、同人たちから不満の声は一気に激しくなった。こうした背景の下、郁達夫はついに結社当初から苦労を共にしてきた創造社を離脱することにした。

職業作家初期の苦闘及び王映霞への熱愛

当時、郁達夫はすでに独特の個性を有する作家として、多くの人、特に若者に知られるようになっていたが、長年にわたる各地での転々とした漂泊生活のため、安定した生活を築くことができなかった。その時、彼はすでにかんがりの原稿料を手にするのできる時代に入っていたが、風流な文人生活を維持するためにはそれでも足らず、作家という本業の他、大学の非常勤講師をしたこともある。例え

人心险恶公道无存此番创造社被人欺詐全系达夫不负责任不事先预防之所致今后达夫与创造社完全脱离关系凡达夫在国内外新闻杂志上所发表之文字当有达夫个人负责与创造社无关特此声明滋免误会。

⁹「創造社出版章程」、『創造社資料』（上）、福建人民出版社、1985年1月、391～395頁。

ば、1927年3月から、郁達夫は上海法科大学から招きを受け、週6時間、月謝礼48元という条件で半年間ドイツ語を教えていた。彼の日記の中には、「生活を維持するために、今年はまた少し翻訳をしなければならない」（為維持生计，今年又必須翻译一点东西）¹⁰というような記述も見られる。

同年、郁達夫は後に彼の夫人になった王映霞という若い女性に出会い、熱烈な恋に陥り、執拗に結婚の申し出を繰り返す事態に至った。当時、王映霞の母親は二人の付き合いに断固として反対した。それは、郁達夫が既婚者である他に、正式な職業に伴う安定した収入がなかったことが大きな理由であったという。

実際に、郁達夫と王映霞が結婚を前提とした交際関係を始めた後も、金銭の面で余裕がなく、郁達夫は時々胡適に百元単位で借金したこともあった。1928年3月、郁達夫が王映霞と一緒に家庭生活¹¹を始めてからの一時期も、経済的な問題で、新しい家具が買えず、仕方なく有料で最低限のベッド、机、食卓及び腰掛けを借りたという¹²。

四 郁達夫——著名作家の創作・生活実態 創作による生活の成り立ち

新しい家庭ができたことで、郁達夫は正面からどうやって必要な金を稼ぎ、二人の生活を立てていくべきかを考えなければならなくなった。この意味で、創造社離脱と王映霞との結婚をきっかけとして、郁達夫の作家としての生活実態には大きな変化が起きた。

残された郁達夫の日記・書簡を見ると、王映霞と交際を始めた後、特に結婚した後、作品を売り、生活費用を稼ぐことに関する記載がかなり多くなってきていることがよく分る。

1927年4月6日：「私は今本の翻訳に取り掛かっている。世の中が落ち着いたら、私がこの本をうまく翻訳することができたら、私達二人が家庭を営む経費を得ることができる」（我现在正在动手翻译书，只教时势一平，我的这本书译得成功，那我们两人组织小家庭的经费就有了。）¹³。

1927年7月18日、郁達夫は小説「考試」（1927.7『教育雑誌』19巻7号）を上海商務印書館『教育雑誌』編集部へ持ちこみ、原稿料40元を手に入れている¹⁴。

恋愛暴露の『日記九種』の出版

¹⁰ 郁達夫「村居日記（1927年1月1日～1月31日）」、『郁達夫文集』第9巻43頁。

¹¹ 1920年7月、25歳の郁達夫は一旦日本から帰国し、孫荃という女性と結婚、子どもを四人もうける。1928年、離婚手続きをせずに王映霞と事実上の結婚生活を始め、1940年の離婚に至る。

¹² 王映霞『王映霞自伝』（1996.12 江蘇文芸出版社）56、69頁参照。

¹³ 『達夫書簡——致王映霞』、天津人民出版社、1982年5月、61頁。

¹⁴ 郁達夫「厭炎日記」、『郁達夫文集』第9巻177頁。

¹⁵ 王映霞『王映霞自伝』63～64頁参照。

¹⁶ 同注9、95～96頁参照。

1927年9月、郁達夫は王映霞との恋愛を中心的内容とした日記——『日記九種』（北新書局）を出版し、近代作家が自らの日記を出版という形で公開する先駆けともなった。『日記九種』は本来極めて私的な恋愛を赤裸々に「暴露」したもので、直ちに読者の注目を集め、脚光を浴びるようになった。出版後、数年のうちに九版まで版を重ね、発行部数は三万部にも達した。

郁達夫がこのように当事者王映霞に相談しようともせず二人の恋愛の詳細な内容を公表したことは、王映霞を大いに怒らせることになった¹⁵。家庭的には波風を生み出すことになった『日記九種』の出版は、広範な読者の獲得とともに、出版社に大きな経済利益をもたらした。これまではほとんど研究者によって言及されてこなかったことだが、美女王映霞と恋愛をして以来、郁達夫は作家としての名声を得ただけでなく、マスコミからも注目されるようになった。そこから、郁達夫の生活に重大な変化が起こったのである。

創作による生活資金供給の安定化

1928年3月、郁達夫と王映霞は正式に結婚を宣言することにした。同年、これまで複数の書店から出版された自分の著作の出版権をまとめて一つの書店にまかせる形で処理を行った。安定した収入を得るために、1929年までに創造社出版部、開明書店、現代書局から出版された『達夫全集』及び日記の出版を一括に北新書局に移行させることにした。当時、郁達夫の作品の売れ行きはかなり好調だったので、出版社側と話し合い、大体月に100～200元の印税が支給される約束をした。これによって、生活の基本費用の問題が解決されたのである。この他、雑誌や新聞紙に作品を載せることで、随時原稿料も手に入るようになった¹⁶。こうしたことは郁達夫の日記・書簡にもはっきり見られる。

1929年9月8日：一週間前、開明書店へ印税を請求、二百元あまりを入手できた；

1930年1月1日：北新書局と印税についての計算をした。北新の分、未販売の本の分を除いて、こちらには未支払い金額千二百元位が残る。

1930年1月20日：「夜、北新へ原稿を持っていく。明日か明後日に多分彼らは原稿料を持って来るだろう。」（晚上送稿去北新，大约明后天他们总就会送钱来。）

1930年3月2日：2月25日、翻訳集『小伍之家』（1930.4

北新書局)を北新書局に持っていく。本日印税二百元が届く。

1930年4月1日:北新書局から印税二百元が届く。

1930年5月1日:北新書局から印税百元が届く。

1930年5月31日:北新書局から印税百元を受け取る。

創作の「多産」時期の到来

要するに、王映霞との家庭生活を始めてから、郁達夫は本当の意味での職業作家となったのである。風流文人と有名美人との恋愛自体も人の耳目を引き、直接に郁達夫の知名度のアップにも繋がった。さらに、安定した家庭生活は郁達夫に文学創作という本業に専念できる心境や環境を与えたため、この時期は郁達夫の創作人生における「豊作期」となった。作家として、この頃の郁達夫は自分の書いたものを売り出すために自ら懸命に努力していた時期が終わり、多くの出版社や雑誌の方からは彼の作品を欲しがって、原稿依頼が殺到し、彼の原稿を得るために郁達夫宅でずっと待つものも出てくるような状況にあった¹⁷。

1932年10月、療養のために、郁達夫は一人で杭州に向い、そこで1ヶ月間滞在した。この時期の郁達夫の日記・書簡を調べてみると、彼の「奮闘」ぶりや出版社・雑誌などとの経済的やりとりがよく窺える。

10月19日:原稿料百元の条件で小説『遅桂花』(1932.12『現代』月刊2巻2号。)を現代書局に送るとのこと。

10月30日:印税250円で短篇集を編み良友図書出版会社に送ること¹⁸。

11月10日:小説『她是一个弱女子』(1932年12月第3版から)の出版権を現代書局に譲る。千元~千二百元の条件。

11月27日:千字10円で小説『飄児和尚』(1933.1『新中華』半月刊1巻1期)を中華書局に送る¹⁹。

こうして、20年代末から、郁達夫は旺盛な創作意欲の下、勤勉に執筆活動に従事し、有名作家の地位を築きあげ、同時に、経済的状況もずいぶん改善された。郁達夫の姪である郁風も当時の叔父のこうした変化を覚えている。「これも彼女の考えに出るものだが、北新書局から改めて重版出版してもらうことにした。こうすることで、毎月一定の金額の印税が支給され、固定した収入が保証されることになる。父親が上海に来たとき(1932年——筆者)、彼らはすでに二人の子供をもうけ、以前に比べるとかなり安定した生活を送っているのだった」(也是她的主意,重新把出过的书编全集由北新书局重排出版,每月抽一定的版税,保证了

固定收入。父亲到上海时,他们已经有了两个孩子,过着比较安定的生活)²⁰。郁達夫の日本留学時代からの友人孫百剛も「嘉禾里の数年間(1927年3月~1933年4月——筆者)、家計は映霞によって管理され、数年を経て、相当の貯金ができたわけなのだ」²¹と、結婚後の郁達夫の経済的生活を語っている。

上流社会生活レベルの達成

この時期の郁達夫の収入は月数百元単位のものになり、当時の物価を考慮すると、相当のものであった。1927~1928年に行われた上海、北京、南京における市民家庭の消費調査によれば、当時、上海南京の労働者家庭の年支出は平均390~475円で、月三十数元から四十数元の程度であった。これはいわゆる低所得層である。

上海において、『中国労働問題』(1927 光華書局)に記されているように、五人家族の一般市民家庭の場合、その生活水準が月の収入によっていくつかの段階に分けられ、66元は一般的で、100~200元は中流階層になり、200元以上は上流社会になるのである。社会全体の中で、知識人階層、公務員及びサラリーマンの大多数は中流社会に属すると言われている。

大学教員を見てみると、1927年6月23日付け南京国民政府教育行政委員会『大学教員資格条例』及び『大学教員薪俸表』には教員の月給を次のように定めており、教授:1級教授500元、2級450元、3級400元、副教授:1級340元、2級310元、3級280元、講師:1級260元、2級230元、3級200元、助教(助手):1級180元、2級140元、3級100元であった。

また、当時の物価を参照すると、一層その価値がわかる。例えば、1920~1926年間、1元=米9キロ、豚肉3.5キロ、1927~1936年間、1元=米8キロ、豚肉2.5キロ、公園入園券20枚、演劇あるいは映画の入場券10枚、新聞の1ヶ月の購読料、数百ページの本一冊等々²²。社会の各階層の所得及び物価水準から考えると、端的に言って、経済収入の面で、郁達夫は当時すでに上流社会に属していたのである。

名流文士の光と影

特に1933年4月、上海から杭州に引っ越して以後、いわゆる文壇の渦中を離れ、政界や文化界の名士達と交際し、華やかな名流文士の生活を始めたのである。例えば、杭江鉄路局、東南五省交通周覧会から招待を受け、三週間をか

¹⁷ 郁達夫の日記には、「王映霞から手紙を受け取り、文章執筆を求める多く人が自宅で待っていることを知る」(接霞的信,知道要文章的人,还有很多在我们家里候着,……)と記している。「滄州日記——1932年10月6日~10月13日」における「10月10日」項を参照。

¹⁸ 最終には、計画中の短篇集は良友図書出版公司でなく、『懺余集』という題名で1933年2月に上海天馬書店によって出版された。趙家璧「回憶郁達夫与我有关的十件事」(『新文学史料』1985年3期)参照。

¹⁹ 『達夫書簡——致王映霞』(1982.5 天津人民出版社)参照。

²⁰ 郁風「三叔達夫〔二〕」,『新文学史料』1980年第1期。

²¹ 孫百剛『郁達夫外伝』,浙江人民出版社、1982年4月、50頁。

²² 陳明遠『文化人与錢』,百花文芸出版社、2001年1月、13~14、32~33、75~76頁。

けて各地の名勝観光地を遊覧し、自然山水風景を描く旅行記を発表して、文学的に高い評価を受けている。

一方、こうした優雅な文士生活を、批判的な視点で見る意見もある。郁達夫の友人で作家でもある楼適夷は、次のように述べている。

（郁達夫が）最後に家を杭州へ移したのは1933年以後のことである。上海の左派の文学グループを離れ、彼は一部の国民党の文化人ぶった官僚に囲まれ、名士として褒め称えられたため、本来官僚というと徹底して嫌がっていた彼が、有頂天になっていたのだった。郁達夫は彼らから浙江の名山大川遊覧に無料招待され、美しい旅行文を少なからず書き、「遅桂花」のようなすばらしい作品も書き上げた。また、彼が土地を買い、家を作ることに協力してくれるものもいた。郁達夫はあの激動の時代にあってまさに自分を隠してしまおうとしていたのだ。当時、彼は杭州にある政府系の新聞紙の学芸欄に日々自分の有閑生活を記しており、局長の宴会に出たとか市長の専用車に乗ったとか、見ていて辛かった。

（郁達夫）最后举家迁去杭州，是到了1933年以后了。脱离了上海的文艺队伍，他被国民党一些附庸风雅的官僚们包围起来，当成一位名士捧来捧去，捧得原来说起官僚就满心厌恶的人，却飘飘然地忘其所以了。人家让他免费地游览浙江的名山大川，那时可写了不少优美的游记文字，也有《迟桂花》那样炉火纯青的作品。有人帮他买地皮，造房子，似乎在那风风雨雨的时代，确实想让自己隐匿起来了。那时他在杭州官方报纸的副刊上，天天写自己的幽闲生活，什么赴厅长的宴会啦，坐市长的汽车了，教人看着难过。——楼適夷「回憶郁達夫」、『新文学史料』1984年3期

また、郁達夫の親しい友人、彫刻家の劉開渠も友人に対して次のように話している。

達夫は杭州に帰ってから、相当苦勞をして家を建てた。当時、彼は杭州の名流の一人であったといえる。そのため、上は省政府主席から、下は局長、大学学長、文芸団体までが客を招待する場合、必ず彼ら夫婦の席が準備されていた。

達夫自从回到杭州后，他千辛万苦地也修起了一座房子。那时他在杭州也是名流之一。所以无论上至省政府主席请客，下至厅长，大学校长，文艺团体请客，都莫不有他们夫妇的一份。

——陳翔鶴「郁達夫回憶瑣記」（1947.3『文芸春秋副刊』1卷3期）、『郁達夫研究資料』（上）115頁

上述の陳翔鶴の証言にも触れているように、郁達夫の作家としての地位の安定化につれて、彼の印税原稿料による金銭収入も確実に増えており、それに応じて、彼は社会の名流と見なされ、各方面の地位を有する人々との交際も増加し、恩恵を受ける場合もあった。その一つの象徴として、1936年、一万五千元あまりを費やして立てた家屋——当時よく知られていた自宅「風雨茅廬」がある²³。

感傷の文学新人から名流作家までの道程

いずれにせよ、20年代末から、郁達夫の生活はそれまでと比べ、非常に大きな変化が起きた。作家としては、二足の草靴を履いた職業作家から完全な職業作家になり、最初中国社会ではあまり見られない、「色情」と見なされるような内容を描写した「異端的」新進作家として登場したが、後に、名家出身の王映霞との恋愛及び結婚、次第に「名士の」「紳士の」著名作家となっていくたのである。

それに伴い、彼の物質的経済的生活も、大きく言えば、落魄感や感傷に満たされ、苦勞の尽きない新人文学者の厳しい生活から、風流で優雅な文人生活に変わっていったのである。それが郁達夫の作家生活の基本的な軌跡であった。

もちろん、30年代半ば以後、婚姻生活の破綻の露呈と、特に日本の中国侵略による戦争の勃発は、郁達夫の生活のすべてに大きな転換をもたらし、最終的に彼はその悲劇的な結末を余儀なくされることとなる。これらは、すでに本論の考察範囲を超えることになるため、他の機会に譲りたい。

おわりに

極めて抒情的な作家として、郁達夫は自分の作品、特に初期作品の中で常に困窮、悲哀、絶望、煩悶苦痛というものをしきりに訴えている。彼の作品における「主人公」＝作者は、いつも絶対的に不自由な経済的境地ないし生死の危機に瀕しているような印象を読者に与えるため、そこから郁達夫の実生活についても、貧乏や不運に翻弄されたというような方向に思われやすかった。ここで問われるべきは、単純に作家本人の感覚、感情、価値観によって左右され、無条件・無分析に作家の言い分に従う姿勢である。作家本人の発言と彼個人の実生活の実態は、当時の一般的感覚や価値観に照らし、客観的かつ真剣に峻別されなければならない。そういう峻別がなければ、作家の真実を到底つかむことはできないだろう。

概ね、若い時の郁達夫は長く祖国を離れていた文学新人として、おそらく多数の新人作家と同様、生活の厳しさ、経済的な不自由さに多く悩んだことは誰もが信じ、認めるところであろう。しかし、一方、作家自ら語っている以外のことも留意すべきなのである。全体的に見れば、郁達夫

²³ 詳細は注12『王映霞自伝』「風雨茅廬」参照。

は王映霞との結婚以前、大学の教員と作家兼編集者という二重の身分を有し、生活はかなり不安定な状態で、思う通りの収入をなかなか得られなかったのは事実だが、それはあくまでもそれなりのレベルでの苦しみであり、必ずしも一般的な生活が維持できない状態ではなかったと考えられるのである。1928 年前後からは、職業作家としての地位が確立し、勤勉な創作活動を通じて余裕のある生活及び経済的地位を築くことができたのである。